

氏名(国籍)	廖 欽 彬 (台湾)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第4870号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	宗教哲学の救済論—後期田辺哲学の研究—
主査	筑波大学教授 文学博士 伊藤 益
副査	筑波大学教授 文学博士 笹澤 豊
副査	筑波大学教授 博士(文学) 桑原直己
副査	筑波大学准教授 文学博士 保呂篤彦

論文の内容の要旨

本論文は、後期田辺哲学を宗教哲学と規定し、そこに内含された救済論的な要素を浮き彫りにしようとするものである。全編は、序章と六章の本論及び結章の、八つの章と、さらには詳細な参考文献表によって構成されている。

序章において、著者は、本論文が、単なる哲学でもなければ宗教学でもなく、あくまでも「宗教哲学」的視点から後期田辺哲学を追究するものであることを宣言し、宗教哲学の救済論の実践可能性を追求しようという姿勢を示す。

第一章「『種の論理』とその挫折」において、著者は、種的共同体というべき「種」が個体としての「個」との対立・葛藤を経て人類的な「類」へと弁証法的に止揚されるというのが、田辺元の「種の論理」を構成する基本的な思索であることを明らかにし、それが、1930年代後半の時点で通有的であった日本の思想界の国家主義的な言説を受容することによって、国家を絶対視し、「種-個-類-種-個-類・・・」という無限の発展構造を閑却して無残に挫折してゆく経緯を克明に追う。

第二章「後期田辺哲学の起点」は、そうした挫折を自覚した田辺が、それを「懺悔道」という、理性を超えた哲学、すなわち他力哲学を構築することによって乗り越えてゆく姿を明確にしたうえで、さらに、その「懺悔道」が絶対批判という方法によって貫徹された「哲学ならぬ哲学」として、田辺の手によって確立されたことを明確にする。

第三章「歴史哲学の展開」は、そのようにして再興された「後期田辺哲学」が、親鸞教を跡づけること、わけても親鸞の言う「三願転入」と「三心積」の時間論に基づく解釈を通して、歴史の問題に肉薄するものとなったことを究明する。

第四章「絶対弁証法とキリスト教的展開」は、第二章で著者が解き明かした田辺の絶対弁証法が、親鸞教の枠組みを超えてキリスト教の救済論にまで敷衍されることに論及し、後期田辺哲学が、親鸞教のみならず広く世界宗教全般に関わる思索を展開するものであることを解き明かす。

第五章「日本仏教とキリスト教との邂逅-絶対宗教をめざして-」は、田辺がキリスト教思想の跡づけに終始することなく、さらにキリスト教と日本仏教、なかんずく念仏禅(禅と念仏との弁証法的融合体)との

否定媒介を図り、さらにそこにマルキシズムの社会的実践性を加味することを通して、いわゆる「絶対宗教」の樹立を企てる経緯を追う。ここでは、日本仏教が、史上はじめてキリスト教の思想と正面から対峙しつつ、後者を補強する形でみずからを深めてゆく過程が、田辺の思索を通じて明らかになる、との指摘がなされる。

第六章「死の哲学」は、「絶対宗教」の境位にまで到達した田辺が、その「絶対宗教」を菩薩道として具体化し、ハイデガーの存在の哲学（生の哲学）と厳しく対決しつつ、「死即愛、愛即死」の境地、すなわち、愛とは己の一切を無にして己を死なしめ他者のために己のすべてを捧げることにはかならないという思索にまで立ち至ったことを明らかにする。

結章は、以上の論究を踏まえ、著者の実存的な立場から、後期田辺哲学の宗教哲学的救済論をほかならぬ筆者自身が踏み行いうるか否かを問う。著者によれば、いずれの宗教にも与することのない自己にとって、己を無にして他者のために全霊を賭することは至難であるが、田辺の言う「絶対宗教」の導きによって自己を精神面で鍛え上げることが、後期田辺哲学を受容する著者自身にとって、今後の大きな課題となることである。これによって、著者の後期田辺哲学研究が、田辺の論脈の内在的理解を企てるにとどまらず、それを基にして著者自身の「いま」「ここ」を生きることの意義を正面から問うものであったことが知られる。

審査の結果の要旨

後期田辺哲学を宗教哲学としてとらえようという試みは、かならずしも斬新なものとはいえない。すでにいくつかの先行研究が、そのような視座に立って、後期田辺哲学の宗教性を独自に解明している。その意味で本論文は、従来の研究の流れに沿ったものと言えよう。「絶対宗教」の確立への試み、あるいは「死即愛、愛即死」という標語で表わされる後期田辺哲学の特性も、本論文以前にすでに先学によって究明されている。しかしながら、このことは本論文が何の独創性ももたないことを意味するわけではない。本論文は、田辺の「懺悔道」の親鸞解釈が時間論に深く関わって、一種の歴史哲学を構築するものであることを明らかにした。さらに、本論文は後期田辺哲学が人間の救済ということを視野におさめるものであることを究明した。これらの点は、著者の独創を如実に示すものであり、その視点の斬新さは本論文を博士論文としてふさわしいものたらしめると言ってよい。

「宗教哲学の救済論」と題しながら著者が「宗教哲学」について明確な定義を与えていない点にはやや疑問が残るものの、それに対しては、本論文全体の論述を通じて、著者は明快な解答へと接近しているように見うけられる。著者にとって、後期田辺哲学は、人間の救済を考えるがゆえに「宗教哲学」であったのだと言えよう。このように、後期田辺哲学を人間全般の魂の救済を志向する救済論ととらえる点にも本論文の独創性を認めることができる。

また、台湾出身の外国人である著者が、日本の近代哲学において最も難解かつ晦渋とされる後期田辺哲学に挑み、その内在的理解を、明快にして正確な日本語によって示しえたことは、著者の学問的力量が尋常なものではないことを示唆している。著者は、今後本論文を、日本および祖国台湾の学界で公表することを通して、国際的に活躍するものと予想される。

なお、本論文の後期田辺哲学への内在的考察は、考察者自身の立場を前面に押し出すあまりともすれば牽強附会となりがちな従来の研究の水準をはるかに凌駕している。その考察は正確無比であり、田辺の論脈を忠実に跡づけるものと認められる。この点からも本論文は、従来の研究水準に達するものであるとともに、一面ではそれを乗り越えるものとして高く評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。